The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コエグの人々の多言語使用について ： 民族間関係と言語
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1993, 4, p. 123-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コエグの人々の多言語使用について
－民族間関係と言語－

稗田　乃

１．序

本報告の目的は、コエグ（Ｋｏｅｇｕ）の人々の多言語使用の実態を明らかにし、そして、そこに見られる言語現象を、コエグの人々と彼らをとりまく民族集団との間の民族間関係から説明することである。コエグの集団は、コエグ語（ナイル・サハラ言語群）を第一言語とする人々が約３００人と、カラ（Ｋａｒａ）の人々の中で生活したためコエグ語を失い、カラ語（アフロ・アジア言語群）を第一言語とする人々が約２００人からなる。このうちコエグ語を第一言語とする３００人は、エチオピア西南部のオモ（Ｏｍｏ）川の河辺にあるクチュル（Ｋｕｃｈｕｒ）村に住み、カラ語を第一言語とする２００人は、クチュル村の南にあるカラの人々の村に分散して、住んでいる。本報告がもとづく資料は、コエグ語を第一言語とする人々を対象としてクチュル村において行なった調査によって集められた。

コエグの社会は、成員が３００人という小さな社会であり、また政治的決定など社会の運営が特定の個人あるいは少数の個人に集中することがなく、集団の合議によって行なわれる「無頭制社会」とも呼べる社会である。このようなかなり均等な社会では、言語現象を説明するのに社会階層というものを考えることは意味がない。それよりクチュル村を中心に、これをとりまく地域における民族集団間の関係を考えるほうがより有効な説明が可能であろう。

コエグの人々をとりまく民族集団には、北にムルシ（Ｍｕｒｓｉ）、東にハマル（Ｈａｍｅｒ）、南にカラやダサネチ（Ｄａｓｓａｎｅｔｃｈ）、西にブメ（Ｂｕｍｅ）（また、ニャンガトム（Ｎｙａｎｇａｔｏｍ）とも呼ばれる）がある。これらの民族集団は、ときにあるものがあるものと同盟を結び、またときに別のものと同盟し、他のものと敵対するといった、つねに互いに緊張関係にある。これらの民族集団のうち、コエグの人々は、つい最近までカラの人々と同盟関係にあり、また現在はブメの人々と同盟を結んでいて、コ

エグの人々のカラの人々とブメの人々に対する関係は、他の民族集団に対する関係より密接なものと考えることができる。ゆえに、ここでは言語現象を説明するにあたってコエグとカラの関係とコエグとブメの関係から考察する。

１．１．コエグ社会、カラ社会、ブメ社会

コエグの人々が住むクチュル村は、エチオピア西南部、オモ川の西岸に位置する。カラの人々は、クチュル村の南にオモ川に沿って散在する村に住み、その人口は、約２千人である。ブメの人々は、オモ川の西にスーダンとの国境にかけて広がるサバンナに住み、その人口は、約５千人である。

コエグの人々は、農耕と、狩猟、採集を生業にしている。オモ川の自然堤防と氾濫原にモロコシを主に栽培している。狩猟は、オモ川の河辺林において簡単な罠と、銃で狩猟を行なう。ただし、銃弾が不足しているため、獲物の数は多くない。彼らの蛋白質摂取の源の中心は、オモ川での漁労による魚である。家畜は、ほとんど持たない。彼らのエネルギー摂取の源として、農耕からの産物は、重要な位置を占めているいるが、コエグの人々の文化の中心的特徴は、狩猟と採集にある。たとえば、コエグの人々は、名付け親の制度を持っている。男子の新生児が生まれたとき、男性の名付け親は、新生児の手に小枝で作った弓と矢を握らせ、その子に名前を与える。「名付ける」というコエグ語の表現は、文字どおりに訳せば、「弓を与える」である。また、子供が成長し、自分の手で初めて大型獣を獲たとき、父親の前で歌う歌がある。その父親は、このとき近隣の人々にハチミツから作った酒をふるまわなければならない。漁労に関しても魚を歌った歌が数多く存在する。魚に人々の心情を託した歌もある。ことばの面では、コエグ語は、野生動物や魚の細かく分類した名称を持っている。「野牛」を意味する一般名称のほかに、雄か雌か、大きいか小さいか、老いているか若いか、等を組み合わせて区別する９個の「野牛」という名詞がある（たとえば、ｄｉｍａｋ：大きな雄の野牛、ｋａｕｒａ：若い雌の野牛、ｂｕｓｈ：老いた雄の野牛、ｇｉｄｅ：若い雄の野牛、ｃ’ｅｎｃｅｌａ：小さな雄の野牛、ｋｏｂｏｒ：成熟した雄の野牛、ｇｏｇｕｒａ：老いた雌の野牛、ｍｏｇｏｓｈ：小さな雌の野牛、ｃａｒｋｅｉｌｂａｎ：成熟した雌の野牛）。

魚についても同様のことがある。コエグの人々の魚についての認識の中で、「兄弟（ｃｅｎｅ）」というものがある。これは、ある特定の魚を特定の魚と結びつけて、「兄弟」とコエグの人々は認識する。これらの結びつけられた魚は、いつでもそうとはかぎらないが、あるときには同じ種の魚の季節的な変態と考えられる。たとえば、コエグの人々の呼

ぶｄｏｗａｄａという魚とｂａｒｕｊｕｇｕｍａという魚は、その区別はｄｏｗａｄａの鰭が白く、ｂａｒｕｊｕｇｕｍａの鰭が赤いだけで、これらの魚は、同じ種の季節的な変態と考えられる。コエグの人々は、これらを「兄弟」と認識する。調査では、１５対の魚の「兄弟」を記録した。また、日本の出世魚のように成長するにしたがって名前を変える魚がいる。鯰の一種のｋｕｗａｄａ（一般名称）は、大きくなるにしたがって、ｗｏｒｃａ，ｋａｎｋａｃａ，ｐｕｒｕｎｄｏと名前を変える。このように、コエグ社会の文化の中心的特徴は、狩猟・採集である。

カラの人々は、彼らの生活を「右手に家畜、左手にモロコシ」と表現する（松田、１９８８）。彼らの観念では、右は左より価値の高いものだから、彼らが観念的には牧畜を農耕より高い価値のあるものとみなしているのは確かである。カラの人々は、牛、羊、山羊を所有し、山羊と羊はオモ川から１０～１５ｋｍほど離れた山麓で放牧するが、牛は近隣の民族集団であるハマルの人々にあずけられる。牛の牧畜に依存し、牛にまつわる慣習を文化の中心的特徴とするハマルにくらべて、カラの人々は彼らの生活を牛にさほど依存していない。むしろ彼らの生活は、農耕に依存している。彼らは、オモ川の自然堤防と氾濫原においてモロコシを中心に栽培をし、自給に十分な農作物をえている。しかも、余剰のモロコシと交換して、ハマルから家畜を手にいれる。カラの人々の牛にまつわる慣習は、ハマルのそれとほぼ同じであり、カラの人々の本来のものとみなす必要はない。むしろカラの人々は、オモ下流域に新しい農耕の方法をもたらした人々と考えられる。たとえば、コエグ語の中に多くの農耕に関係する語彙が、カラ語から借用されている（耕作地：Ｋｏ　ｈａａｍｕ［Ｋａ　ｈａａｍｉ］、草を刈る：Ｋｏ　ａｃ’ａａｒｉｙａａ［Ｋａ　ｃ’ａａｒａ］、鍬：Ｋｏ　ｇａｉｔａ［Ｋａ　ｇａｉｔａ］、収穫する：Ｋｏ　ａｐａｔｉｉｙａａ［Ｋａ　ｐａｔａ］、手でモロコシを脱穀する：Ｋｏ　ａｓｈａｋａｍｉｙａａ［Ｋａ　ｓｈａａｋｕｍａ］、粉に挽く：Ｋｏ　ａ’ｄｉｉ’ｄｉｙａａ［Ｋａ　ｄｉｉｓｕｍｏ］）。カラ社会の文化の中心的特徴は農耕である。

ブメの人々は、その地理的分布と生業形態から２つのグループに分けられる。１つは、オモ川沿いの地域に住み、オモ川の自然堤防と氾濫原で農耕を生業にしている。他の１つは、オモ川の西に広がるサバンナに住み、サバンナでの牧畜を生業にしている。ブメの人々は、農耕を生業にしているグループと牧畜を生業にしているグループの間で生産物を交換することでこの地域の環境に適合した生活を行なっている。しかし彼らの文化の中心的特徴は、北東アフリカの牧畜民に見られる典型的な、牛にまつわる慣習を文化の中心にし

た牧畜＝「牛文化複合」と呼ぶものである。

１．２．コエグ、カラ、ブメの社会関係、歴史

コエグの人々とカラの人々が接触したのは、たかだか二、三世代前であったと考えられる。このことは、カラの人々の伝承と、現在はブメの人々の中に一地域集団として取り込まれてしまっているオモ・ムルレの人々が伝える伝承によって推測できる（Ｈｉｅｄａ、１９９１ａ）。コエグの人々は、カラの人々が移住してくる以前からオモ川下流域に住んでいた。カラの人々は、オモ川の東にある山岳地帯からオモ川流域に移住した。そして、コエグの本来の土地を占拠し、農耕を始めた。コエグの人々は、逆に、カラの人々から土地を借りて農耕を行なうことになった。カラの人々の伝承によれば、このときコエグの人々は、畑をつくっておらず、カラの人々がかれらに農耕を教えたのだという（松田、１９９１）。一方、コエグの人々は、かれらの独自の農耕の起源についての伝承を持っており、かれらの農耕の起源については、カラの人々の伝承とは一致しない。この不一致に関しては、言語の面でも証明できる。コエグ語の農耕に関係する語彙の中に、カラ語起源以外の語彙が見つかることから、コエグの人々は、カラの人々から新しい農耕の技術を導入する以前に既になんらかの農耕の技術を持っていたことがわかる（たとえば、モロコシ：Ｋｏ　ｒｕｕｂｕ［Ｋａ　ｉｓｈｉｎｇ’］、耕す：Ｋｏ　ａｋｏｈｉｙａａ［Ｋａ　ｐａｋ’ｉｄｉｉｎａ］）。カラの人々の移住の際、エチオピア西南部に広く存在する習慣である一種の盟友関係の名のもとに、農地の借り手のコエグの人々と貸し手のカラの人々は、関係をもつことになった。この関係は、コエグ語でベルモ（ｂｅｌｍｏ）、カラ語でベル（ｂｅｌ）と呼ばれる。この関係は、世帯ごとに結ばれ、関係を結ぶ者のあいだで物品の交換、贈与が行なわれる。コエグからは、モロコシとハチミツが、カラからは山羊、羊、弾丸などがもたらされる。また、コエグの人々は、ベルモであるカラの人々の畑を耕作したり、鳥追いの番をすることもある。この関係は、コエグの人々はそうとは認めていないが、どちらかといえばコエグのカラへの従属的な関係である。実際、すべての耕作地はカラの所有ということになっており、コエグの人々にはただ耕作権のみがある。

また、この両者の間には通婚関係がないばかりでなく、一種の差別的な関係がある。カラの人々は、コエグの人々と同じ容器から飲食をすることがない。

ことばの面では、うえで述べた関係を並行した関係が観察できる。クチュル村を中心とするこの地域において、カラ語が上位言語で、コエグ語は下位言語である。コエグの人々のほとんどは、男女の差なく、成長するとともにカラ語を習得し二言語使用者になるが、

その逆に、カラの人々はわずかな例外をのぞいて、コエグ語を習得することはない。また、借用も上位言語であるカラ語から、下位言語であるコエグ語へもっぱら借用される。

コエグの人々とブメの人々が密接な関係を持つようになったのは、１９８９年２月以降のことである。それ以前は、コエグの人々はカラの人々と密接な関係を結んでおり、また、カラの人々とブメの人々の間には敵対関係が存在したので、当然コエグの人々とブメの人々は敵対関係にあった。しかし、両者は全く没交渉であったわけではなく、また、ブメの人々の言い伝えによれば、カラの人々がオモ川下流域に移住してくる以前に、ブメの一部とコエグの人々は密接な関係を結んでいたという。

この地域には民族集団間に常に緊張関係が存在すると述べたが、きわめて弱小集団であるコエグの人々は、緊張関係にある大きな民族集団にかこまれた「無風地帯」を形成していた。クチュル村へは、対立する民族諸集団に属する個人が来訪し、情報をもたらし、また情報を集めていく。対立する民族集団に属する個人は、その対立する民族集団の支配地域を旅するために、道案内としてコエグの人々を利用していた。

コエグの人々とブメの人々が同盟関係を結んだ１９８９年２月９日以前の１、２年間、コエグの人々とカラの人々の間で土地の所有に関して紛争が生じていた。カラの人々は、コエグの人々から耕作権までを奪って、この地域から追い出そうと考えたのにたいして、コエグの人々は、自らの土地の本来の所有権を主張し始めていた。一方、ブメの人々は、スーダンで手にいれた大量の銃で勢力を拡大していた。ブメの人々の生活を支えているのは、前に述べたようにサバンナでの牧畜とオモ川流域での農耕である。勢力の拡大とともに増え続ける人口圧は、オモ川流域での耕作地の拡大を必要とした。こうしてブメの人々は、コエグとカラの紛争に目を向けるようになった。

ことばの面では、コエグ語にはカラ語からほどはブメ語から多くの借用語は入っていない。しかし牧畜に関係する語彙を中心にブメ語からコエグ語は借用している（たとえば、焼き印：Ｋｏ　ｍａｃａｒ［Ｂｕ　ｅｍａｃａｒ］）。また、コエグの人々は急速にブメ語を習得しつつある。

次章では、コエグの人々の多言語使用の実態を詳細に検討しよう。コエグの人々にとってカラ語とブメ語が第二言語としてどのような役割を果たしているかを見てみよう。

２．コエグの人々の多言語使用

コエグの人々は、第一言語としてコエグ語（スルマ言語群）のほかに、第二言語として

カラ語（オモ言語群）と、ブメ語（ナイル諸語）を話す。コエグ語とブメ語は、ともに、アフリカの言語を大きく分類したときの４つの言語群のうちのナイル・サハラ言語群に属するが、そのなかでの下位区分では、コエグ語はスルマ言語群に、ブメ語はナイル諸語にそれぞれ所属し、コエグ語とブメ語のあいだでは伝達は不可能である。また、カラ語は、アフロアジア言語群のなかのオモ言語群に属し、カラ語は、コエグ語やブメ語とは系統的にも言語の構造的にも全く異なり、それらとは伝達不可能である。本報告の目的は、コエグ社会における、第二言語としてのカラ語とブメ語の性格を探ることである。また、複数の言語が接触するとき、マイノリティの言語が死滅する場合と、死滅しない場合がある。たとえば、コエグの人々の近くに住むオモ・ムルレの人々は、彼ら自身の言語、オモ・ムルレ語を話すことのできる者は、９名の老人のみになっており、オモ・ムルレ語は、死滅する運命にある。他方、コエグの人々は、自らの言語を保持している。このような違いは、いったいどこからくるのか。このことにも少し触れる。

コエグ社会におけるカラ語とブメ語の性格を調べるために、３つの調査をおこなった。１）幼児から成人まで、男女２８６名に面接し、コエグ語とカラ語とブメ語を聞き、理解できるか、また話すことができるかを質問した。２）そのうちの４６名には、これらの３つの言語についてそれぞれ５０の語彙を選んで、テープで録音したものを聞かせ、聞いて、理解できるかを調べた。また、さらにそれら５０の語彙について、テープに録音したコエグ語を聞かせ、カラ語とブメ語に翻訳させることで、カラ語とブメ語の話す能力を調べた。３）また、成人男性３０名、成人女性１３名に面接し、話す相手により、また、どんな話題のときに、コエグ語とカラ語とブメ語のうちのどれを使用するかを調査した。

２．１．言語習得と社会関係

調査１）からもたらされる結果は、コエグの人々の実際の言語能力を反映するのではなく、コエグの人々が自分達の言語能力をどのように考えているのか、あるいは自分達の言語能力はどうあるべきかと考えていることを反映しているのであることを考慮されなくてはならない。調査１）の結果から分かることをまとめておこう。

調査１）では、コエグの人々は、すべて、コエグ語であれ、カラ語であれ、ブメ語であれ、話す能力を持つと答えた者は、必ず聞き、理解する能力も持つと答えている。また、ブメ語を習得していると答えた者は、カラ語も既に習得していると答えていて、ブメ語を習得しているが、カラ語は未習得であると答えた者は、ブメの人々のあいだで育った１人だけであった。この事実から、表１で、コエグの人々は、ブメ語を話し、聞くことのでき

る者なら、カラ語も話し、聞くことができる・・・（6）、ブメ語を話すことはできないが、聞くことのできる者は、カラ語を話し、聞くことができる・・・（5）、ブメ語は話すことも聞くこともできないが、カラ語を話すことのできる者は、カラ語を聞き、理解する能力を持つ・・・（4）、カラ語を話すことはできないが、聞くことのできる者は、第一言語のコエグ語は話し、聞くことができる・・・（3）、第一言語のコエグ語だけを話し、聞くことができる・・・（2）、第一言語のコエグ語を話すことはできないが、聞き、理解する能力は持つ・・・（1）、全くブメ語もカラ語もコエグ語も習得していない・・・（0）のように、特殊な1例を除いて、すべてこれら7つの群にわかれた。

表1

	コエグ語	カラ語	ブメ語
聞き、理解する能力あり	(1)	(3)	(5)
また、話す能力あり	(2)	(4)	(6)

この7つの言語能力の群を縦軸に、年令を横軸にしたのが、表2と表3である。表2は、被調査者が男性の表で、表3は、被調査者が女性の表である。ただし、年令は、被調査者がみずから答えた年令であり、どうみても実際の年令より、より年長に答える傾向が、特に成人でうかがわれる。

表2

(6)							1人	6人	3人		3人	2人	2人
(5)										1人			
(4)					1人	1人	3人	1人					
(3)			4人	6人	6人	10人	12人	1人		3人	5人		
(2)	1人	2人	2人	1人	1人								
(1)		3人	3人	4人	2人		1人						
(0)	10人	1人											
年令	1才	2才	3才	4才	5才	6才	7才	8才	9才	10才	11~20才	21~30才	31~40才

表2 (つづき)

(6)	2人	2人	6人	7人	4人	4人
(5)						1人
(4)						
(3)	3人		1人	1人		
(2)						
(1)						
(0)						
年令	41~50才	51~60才	61~70才	71~80才	81~90才	91才~

表3

(6)							1人		1人	2人	7人	4人	
(5)								1人		1人			
(4)					3人		1人		1人	4人	1人		
(3)		1人	3人	6人	4人	5人	13人	2人	2人	2人	10人	10人	5人
(2)		1人			1人								
(1)		4人	8人	2人	3人	3人	2人						
(0)	3人	1人											
年令	1才	2才	3才	4才	5才	6才	7才	8才	9才	10才	11~20才	21~30才	31~40才

(6)	3人	1人	4人	10人	3人	4人
(5)						
(4)		1人				
(3)	3人		1人	1人		
(2)						
(1)						
(0)						
年令	41~50才	51~60才	61~70才	71~80才	81~90才	91才~

この表２と３の見方は、たとえば、１才の男子は、１０人が、まだ第一言語のコエグ語でさへ習得していず、１人だけが、コエグ語を話し、聞くことができるほか、カラ語を聞き、理解する能力を持っていることを示している。

この表２と３から分かることは、つぎのようにまとめることができる。１）男子は、カラ語の習得が３才頃に始まり、８才にはほぼ完成している。なぜなら、８才以上になれば、３以下の言語能力の群が極端に少なくなることから分かる。女性は、カラ語の習得は、男子と同様に、３才頃から始まるが、成人をすぎても３以下の言語能力の群は少なくない。２）ブメ語に関しては、男子は８才頃に習得し、それ以上の年令の者はその多くがブメ語を話すことができると答えている。なぜなら、８才以上では、５以下の言語能力の群が極めて少なくなる。女性は、２０才以上になって、やっとブメ語を話すことのできる者の数が増えてくる。

では、実際に言語能力を調べる調査を行なってみて、コエグの人々の自己申告と、実際の言語能力に差があるかどうかをみてみた。もし、差があれば、それは、コエグの人々がそうあるべきだと考えていることと、実際の言語能力とのあいだに差があることを意味しており、それは、第二言語としてのカラ語とブメ語の性格を明らかにするであろう。

実際の言語能力を調べるための調査が、さきに述べた調査２）である。任意に５０語を選んで、それぞれのコエグ語、カラ語、ブメ語をテープに録音し、たとえば、カラ語の聞き、理解する能力を調べるためには、カラ語のテープを聞かせ、その語の意味をコエグ語で答えさせた。カラ語の話す能力を調べるためには、コエグ語のテープを聞かせて、その語をカラ語に翻訳させた。テープは、コエグ語、カラ語、ブメ語のそれぞれを第一言語とする話し手たちによって録音されており、カラ語とブメ語は第二言語であるコエグの人々にとっては、カラ語とブメ語は、少々、聞き取りにくくなっているものと考えられる。表４は、任意に選択した５０語の英語訳である。

表4

1	dog	2	cattle	3	ox	4	cow	5	to castrate
6	milk	7	goat	8	baboon	9	leopard	10	spot
11	claw	12	elephant	13	buffalo	14	tail	15	to hunt
16	to chase	17	bow	18	spear	19	to stab	20	meat
21	fish	22	hapoon	23	to fish	24	fish-hook	25	fish scale

26 honey 27 mosquito 28 fly 29 termite 30 tree

31 to cut 32 flour 33 sorghum 34 grass 35 bark of tree

36 branch 37 seed 38 to grow 39 field 40 to cultivate

41 to seed 42 to harvest 43 to spread to dry 44 to grind

45 to lie down 46 to sleep 47 to stand up 48 to sit down

49 to see 50 to speak

表５は、コエグの人々のカラ語を実際に聞き、理解する能力と、話す能力を示しており、表６は、ブメ語の聞き、理解する能力と、話す能力を示している。質問にたいして正しく答えた正解率をパーセンテージで表している。

表5

男性			女性		
被調査者 (年令)	聞く能力	話す能力	被調査者 (年令)	聞く能力	話す能力
M 1 (4)	0				
M 2 (5)	58				
			F 1 (5)	74	56
M 3 (7)	90	0	F 2 (6)	76	72
M 4 (7)	78	66	F 3 (6)	0	
			F 4 (7)	80	50
			F 5 (7)	72	50
			F 6 (8)	96	84
M 5 (10)	98	86	F 7 (9)	86	82
M 6 (10)	94	88	F 8 (9)	90	88
M 7 (10)		92	F 9 (10)		90
M 8 (10)	98	94	F10 (10)	78	68
M 9 (10)	90	70	F11 (10)	82	64
M10 (10)	96	94	F12 (12)	88	92
M11 (14)		100	F13 (15)		86
M12 (15)		98	F14 (15)	96	94

表5（つづき）

男性			女性		
被調査者（年令）	聞く能力	話す能力	被調査者（年令）	聞く能力	話す能力
M13 (15)		94	F15 (15)	96	94
M14 (16)	100	100	F16 (16)	88	90
M15 (16)		92	F17 (16)	88	0
M16 (18)	100	96	F18 (18)	84	88
M18 (20)	98	96	F19 (19)	94	92
M19 (27)	100	100			
M20 (28)		84	F21 (40)		98
			F22 (60)		98

表6

男性			女性		
被調査者（年令）	聞く能力	話す能力	被調査者（年令）	聞く能力	話す能力
M 5 (10)	50	58			
M 6 (10)	28				
M 7 (10)	32				
M10 (10)	44	32			
M11 (14)	60	46			
M12 (15)	52		F14 (15)	40	
M13 (15)	62				
M14 (16)	72	58			
M15 (16)	30				
M16 (18)	74	76	F18 (18)	30	
M17 (20)	86	82			
M18 (20)	80	80			
M19 (27)	64	54	F20 (25)		78
M20 (28)	42				
M21 (45)	88	86	F22 (60)	68	

表５と６で同じ記号を与えられている被調査者は、同一人物であることを示している。たとえば、表５のＭ５と表６のＭ５は、同じ被調査者を表している。また、数字が欠けている部分は、聞き、理解する能力か、話す能力か、そのどちらか一方が調査できなかったことを示している。

カラ語に関しては、３才以下の被調査者を調査することはできなかった。３才以下の被調査者は、調査を行なおうとしても、はじめから分からないと全く答えようとしなかった。これと同様に、表５のＭ１も、質問のはじめから終わりまで分からないと答えた。表５から分かることは、つぎのとおりである。男子も女子も（但し、男子は８才と９才の資料が欠けているが）、８才でカラ語を聞き、理解する能力が獲得されることが、その正解率が９０パーセント以上になっていることから、分かる。また、８才でカラ語を話す能力がほぼ獲得されることが、その正解率が８０パーセント以上になることから、分かる。表５と表２、３をつきあわせて、分かることは、カラ語に関しては、コエグの人々の実際の言語能力とコエグの人々がこうあるべきだと考えていることとは、あまり差がないことである。ただし、女性の場合はそれらに差がないのだが、男性の場合、実際の言語能力は、若干、自己申告よりも劣るように思われる。このことは、コエグ社会をとりまく他民族集団との関係において、外と関係を持っているのは男性であることから、男性はより第二言語の能力を持つべきだと考えていることを反映している。

ブメ語に関しては、１０才未満の被調査者を調査することはできなかった。この調査は、言語能力に自信のない者にとっては、好ましくない調査であった。この調査をつよく拒否する者は、その言語にたいして知識をあまり持たないと考えられる。ブメ語の調査で、８０パーセント近くの正解率を示したのは、男性では１８才以上、女性ではＦ１８の女性のみであった。表２では、男性は８才以上の多くがブメ語を話せると答えている。しかし、実際のブメ語の言語能力は、表６から分かるように１８才未満ではかなり低く、また、１８才以上でも十分なブメ語の言語能力を持つ者は多くない。男性の自己申告と実際の言語能力テストの結果との差は、ブメ語の場合のときと、カラ語のときとでは、ブメ語の場合が圧倒的に大きい。女性は、表３から分かるように、自己申告でもブメ語を話せると答えている者は、さほど多くない。実際のブメ語の言語能力のテストでも、同じ結果がでている。

この事実は、女性がより正直であると考えるのではなく、つぎのように考えるべきである。つまり、ブメ語は、コエグ社会のなかで、ある特定の性格を帯びた第二言語であると

考える。さて、それでは第１章で述べた、コエグ、カラ、ブメの民族間関係をおもいおこそう。コエグの人々は、かつては、カラの人々と密接な関係を持っていた。しかし、現在、彼らは、カラの人々と敵対関係にあり、ブメの人々と密接な関係を持とうとしている。このことは、ブメ語が、現在、コエグ社会では権威ある言語である可能性を示している。コエグの人々は、カラの人々とは歴史的に古くから関係を持っていた。だから、カラ語は、第二言語としてコエグ社会では成熟している。それゆえカラ語の言語能力は、成長のかなり早い時期に獲得される。また、その獲得時期に男女差は、ほとんどない。実際の言語能力についても、男女差は、ほとんど存在しない。また、現在、カラ語は、権威ある言語ではないから、彼らがこうあるべきだと考える言語能力と、実際の言語能力のあいだにも差はない。

一方、コエグの人々がブメの人々と密接な関係を持つようになったのは、最近のことであり、ブメ語は、第二言語としてコエグ社会では成熟していない。しかし、現在ではブメ語は、コエグ社会では権威ある言語である。対外的な政治を含めて、政治参加が男性に限られているコエグ社会にあって、ブメ語により接近することを求められているのは男性である。それゆえ、ブメ語の言語能力は、男性のほうが女性より早い時期に獲得され、言語能力そのものも男性のほうが高い。さらに、彼らがそうあるべきだと考える言語能力と、実際の言語能力のあいだの差も、男性における差のほうが女性における差よりも大きい。コエグ社会でのカラ語とブメ語の役割を、対比させてまとめるとつぎのようになる。コエグ社会においてカラ語は、第二言語として成熟しているのにたいして、ブメ語は、未成熟である。カラ語は、以前はコエグ社会のなかで権威ある言語であったが、今では権威ある言語ではなくなってしまったのにたいして、ブメ語は、現在、権威ある言語である。これらのことから、以下の事実が説明できる。コエグの人々のカラ語の習得時期に、男女の差がない。コエグの人々の実際のカラ語の言語能力と、コエグの人々がこうあるべきだと考えている言語能力と、その差が小さい。一方、コエグの人々のブメ語の習得時期に、また、実際のブメ語の言語能力に男女の差がある。コエグの人々の実際のブメ語の言語能力と、コエグの人々がこうあるべきだと考えている言語能力と、その差が特に男性で大きい。では、ブメ語のコエグ社会での第二言語としての性格について、さらに調査３）で考察しよう。

２．２．言語使用と社会関係

調査３）では、成人男性３０人（１４才以上）、成人女性１３人（１５才以上）に面接

し、話し相手により、また、どんな話題のときにコエグ語、カラ語、ブメ語のうち、どれを使うかを調査した。

表７は、コエグの人々がどのような相手にたいして、３つのうちどの言語を使用するかを調べた結果である。コエグ語は、第一言語であり、すべての被調査者があらゆる相手にたいしても使用すると答えたので、表７からは削除してある。つぎに、どのような相手といっても、それは、被調査者と同じコエグの人々であり、話し相手のタイプを、同世代に属する男性か、同世代に属する女性か、被調査者本人より年長の男性か、被調査者本人より年長の女性か、被調査者本人より年少の男性か、被調査者本人より年少の女性かの６つに分けた。また、話し相手がカラの人々やブメの人々であるとき、コエグの人々は、もっぱらカラ語やブメ語をそれぞれ使用する、あるいは、使用するのが好ましいと答えた。

表7

			使用言語（男性30人）		使用言語（女性13人）	
			カラ語	ブメ語	カラ語	ブメ語
話し相手のタイプ	同世代	男性	30人	26人	13人	2人
		女性	30人	3人	13人	3人
	年長の世代	男性	30人	14人	13人	3人
		女性	30人	2人	13人	3人
	年少の世代	男性	30人	1人	13人	3人
		女性	29人	0人	13人	3人

たとえば、表７で、男性３０人は、同世代の男性や女性にはカラ語を使い、また、男性３０人中、２６人は、同世代の男性にはブメ語を使うが、男性３０人中、３人のみ同世代の女性にたいしてブメ語を使うと答えている。表７から分かることは、つぎのようにまとめられる。被調査者が男性であれ、女性であれ、また、話し相手が同世代の男性であれ、女性であれ、年長の世代の男性であれ、女性であれ、年少の男性であれ、女性であれ、カラ語を使用すると答えている。男性は、話し相手が同世代の男性である場合に、かなりの割合でブメ語を使用する。男性は、話し相手が女性であれば、ブメ語をほとんど使用しない。また、話し相手が年少である場合、ブメ語をほとんど使用しない。女性は、話し相手がどんな者でも、ブメ語をほとんど使用しない。

興味あることは、男性は、同世代の男性にたいしてブメ語をよく使用し、その割合は、話し相手が年長の男性であるときよりも高いことである。これは、ブメ語がコエグ社会で権威ある言語であると考えるとよく説明できる。つまり、ブメ語は、年長者にたいしての尊敬や丁寧な表現のために用いられるのではなく、同世代の男性の中で自らの権威を高めるために用いられるのである。男性が女性や年少の話し相手にブメ語を使用しないことは、かれらにたいしてとりわけ権威を高める必要もないからであろう。

表８は、表７の調査と同じ被調査者にどのような話題でコエグ語、カラ語、ブメ語のどの言語を使用するかを尋ねた結果である。選んだ話題は、ガールフレンド（女性にとっては、ボーイフレンド）、政治、日常の仕事、毎日の食事、人の噂話の５つである。

表8

		使用言語（男性30人）		
		コエグ語	カラ語	ブメ語
話題のタイプ	ガールフレンド	30人	29人	0人
	政治	30人	30人	28人
	日常の仕事	30人	30人	1人
	毎日の食事	30人	30人	2人
	人の噂話	30人	30人	28人

		使用言語（女性13人）		
		コエグ語	カラ語	ブメ語
話題のタイプ	ボーイフレンド	13人	13人	1人
	政治	13人	13人	12人
	日常の仕事	13人	13人	0人
	毎日の食事	13人	13人	2人
	人の噂話	13人	13人	12人

たとえば、表８で、男性３０人中、２８人は、話題が政治のときにブメ語を使用するが、誰一人、ガールフレンドが話題のときはブメ語を使用しない。表８から分かることは、第一言語であるコエグ語と、第二言語として成熟したカラ語は、どんな話題のときにも使用

されるが、ブメ語は、話題が政治と人の噂話のときに使用される。話題が他のもののとき、ブメ語はほとんど使用されない。この現象に関しては、男女の差がない。表７で話し相手がどんなものであれ、ブメ語はほとんど使用しないと答えている女性でさえ、政治が話題のときはブメ語を使用する、あるいは、使用すべきだと考えている。人の噂話といっても三面記事的なものではなく、人間の評価である。コエグ社会のような規模の小さな社会では政治が個人からかけ離れていないので、人の噂話は政治の話題の一部と考えられる。また、コエグ社会では、政治を話題にする場というのは、政治を決定する集会のみならず、コーヒーを飲んだり、食事をしたりしながらの雑談の場が大きな役割を果たしている。このような雑談の場で、人の噂話や政治の話のなかで政治の方向が決定されるのが普通である。このように考えれば、ブメ語は、コエグの人々によって話題が政治のときにもっぱら使用されるといえる。

表７と表８から分かることは、つぎのようである。コエグの男性が同世代の男性を話し相手にしたときに、さらにそのときの話題が政治であるときに、もっぱらブメ語を使用することは、ブメ語がこの社会で権威ある言語であることから説明することができる。

３．まとめ

コエグの人々は、常に緊張した民族間関係のなかで、多言語使用者となることで生き残ってきた。また、コエグの人々が多言語使用者となることで、コエグ語は死語となることを免れた。カラの人々の側から考えれば、以前はコエグの人々にたいして優位な関係をもっていたカラの人々は、コエグの人々をカラ社会の中に取り込むのではなく、劣位の人々としてコエグの人々をカラ社会の外側におくことによって、苛酷な自然環境に順応してきた。一方、ブメの人々のなかに完全に取り込まれてしまったオモ・ムルレの人々が、この地域に住んでいる。かれらは、その若い世代はすべてブメ語を話すようになって、かれらの本来の言語、オモ・ムルレ語を話すことのできるのは、９人の老人のみになっている。ブメの人々の自然環境にたいする生き残り戦術は、耕作地と放牧地の拡大であった。耕作地と放牧地の拡大という目的のために、ブメの人々は、さまざまな民族をその社会の中に取り込んできた。そのとき、さまざまな言語が、オモ・ムルレ語のように死語となったであろう。複数の言語が接触するとき、その言語が死語となるか、あるいは、死語となることを免れるかは、その言語の構造が決定するのではなく、接触する社会がどのような関係をもっているかが決定するのである。

本報告での３つの調査は、コエグ社会でカラ語が第二言語として成熟しているにもかかわらず、カラ語がコエグ語にとってかわることはなかったことを示した。また、今は、ブメ語が、コエグ社会のなかで権威ある言語であることを示した。さまざまな言語現象は、社会関係のなかでよく説明することができる。

注

本報告が基づく調査は、２度の文部省科学研究補助金（海外学術調査）を受けたプロジェクトによって可能になったものである。それぞれのテーマは、「乾燥アフリカにおける農・牧社会の比較研究－北東アフリカを中心に」と「北東アフリカにおける生業システムの比較研究－民俗モデルの構築とその適用の可能性」である。調査は、１９８７年の１２月から１９８８年の２月までと、１９８９年の１月から３月までと、１９９０年の１月から３月までの、３回にわけて行なった。

参考文献

HIEDA, Osamu. 1990. "KOEGU, a preliminary report." *Journal of Swahili and African Studies*, 1, pp. 97-108

1991a. "Omo-Murle, a preliminary report." *Journal of Swahili and African Studies*, 2, pp. 73-106

1991b. *Koegu Vocabulary, with a reference to Kara.* (African Study Monographs, Suppl. 14), The Center for African Area Studies, Kyoto University

稗田乃、１９９２．「コエグの人と魚－環境認識の習得」『国立民族博物館研究報告』１７－１、ｐｐ．９７－１１９

HIEDA, Osamu. 1992. "A Grammatical Sketch of the Koegu Language." *Journal of Swahili and African Studies*, 3, pp. 131-155

松田凡、１９８８．「オモ川下流低地の河岸堤防農耕－エチオピア西南部カロの集約的農法－」『アフリカ研究』３２、ｐｐ．４５－６７

１９９１．「民族集団の『併合』と『同化』：エチオピア西南部ＫＯＥＧＵをめぐる民族間関係」『アフリカ研究』３８、ｐｐ．１７－３２